

		「つながり」を大切に 自ら未来を切り拓いていく児童の育成				総合評価
運営方針		○『TSUNAGARU～人と、世界と、未来と、心と。』を合い言葉に、強い使命感をもった教職員集団で、子どもたちに「予測不可能な時代を生き抜く力」を育てる。 ○保護者・地域と学校が双方向で協力し合える学校づくりを通して地域の人々から愛され信頼される学校を目指す。				B
令和4年度の成果と課題		指導の重点				
【成果】 ○言語科指導マニュアル策定によって教員共通理解のもと研究推進。 ○図書コーナー設置や本に親しむための様々な企画を実施。 ○自主学習コメント評価や表彰の機会により主体的に取り組む児童増加。 ○異学年交流や集会活動の充実により、繋がりが合う関係。 ○体力テスト5種目以上、県平均を上回る。外遊びチャレンジに積極的参加。 ○小中一貫教育の諸計画完遂。パンフレットで地域へ周知。 ○ICTによる業務改善により残業時間月平均2時間30分削減。 【課題】 ●「読解力の向上」に向けた研究を継続・深化。非認知能力における課題の分析を。 ●読書量の増加や五位獲得には担任の働きかけ。読書の測り方を見直し。 ●集会行事等、活動が増えすぎて負担にならないよう留意。 ●ふるさと学習の取組内容を全体共有と引き継ぎ。 ●家庭生活状況の二極化、SNS使用時間増加が課題。家庭との連携。 ●五條東部学園としての小中一貫教育推進。 ●担当や分業業務の負担が偏らない配置と支え合える体制作り。		○『論理国語』を手立てとした確かな読解力の育成		知		
		○多くの言葉に出会うための読書活動の推進		徳		
		○『自主学習』を中心とした学習意欲の向上				
		○自己を見つめ直し他者を思いやる心の育成		体		
		○多岐にわたる体験活動を通じた協調・協働性の育成				
		○地域と繋がり誇りに思えるふるさと学習の充実				
		○運動習慣の定着による基礎体力の向上				
		○発達に応じた保健指導による基本的な生活習慣の定着				
		○豊かな関係作りによるレジリエンスの強化				
評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策・評価指標	自己評価結果	成果と課題(評価結果の分析)	改善方策等	学校関係者評価(結果・分析)及び改善方策
知	A 『論理国語』を手立てとした確かな読解力の育成	児童が、文章の内容を論理的に理解できるように、『論理国語』を基盤とした指導を推進し、児童の読解力を育成する。また国語の授業を構成する要素(音読・板書・発問等)の研究を進めることで、教員としての見識を深め、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す。学力調査において、県平均を上回るポイントを獲得する。	3	授業改善に向けて、論理国語の授業マニュアルを作成し、論理国語について共通理解を図ることができた。研究授業を中心に、発問について研究を重ねたことで、課題に対して主体的に取り組む児童の姿が増えた。しかし、県の学力調査では、平均を上回った学年と下回った学年が半数ずつで、読解力に課題を残す結果となった。	・授業マニュアルの使用、授業づくりについて研究を継続 ・「書く力」の向上への取り組み	・県の学力調査で平均を下回った学年には、書く力向上への取り組みを実施する。 ・読書の習慣は、低年齢の時期が大事であるので、今後も継続してほしい。
	B 多くの言葉に出会うための読書活動の推進	児童が本の楽しさを実感できるように、教師による読み聞かせを継続実施する。また読書環境を整備することで、本を手取る機会を増やし、読書をより身近なものにする。そして、児童自身が様々な読書活動を通して、読書の楽しさや味わい、読書力の向上に繋げる。読書を通して新しい言葉を知ることができたことと答える児童70%以上を目指す。	3.2	・新しい言葉を知ることができたかとの質問に、肯定的な回答が8割を超えていた。読書をするのと知識を得ることができると実感している児童が多いことがわかった。 ・図書室の本のレイアウトや学年文庫の整理など、学校全体の読書環境を整えることができた。その他にも地域ボランティアによる読み聞かせや読書週間、読書スピーチ等の活動を通して児童が様々な本に出会う機会を作ることができた。 ・家庭で読書をする習慣は身に付いていない。	・より多くの言葉に出会うための読書活動の精査 ・獲得した言葉をアウトプットする機会の確保 ・家庭での読書習慣が身に付くような取り組みや家庭への啓発	
	C 『自主学習』を中心とした学習意欲の向上	自主学習システムを構築し、学校全体で推進を図る。担任からの評価や自主交流会を行うことで自主学習に対する児童の意欲を高める。またICT機器やすららドリルを活用し、児童の学習に対する抵抗感を和らげ、楽しみながら学習に取り組む児童を育成する。学校や家で学習することが楽しいと思う児童80%以上を目指す。	2.9	東小自主学習システムを構築し、学校全体で自主学習を推進することができた。自主学コンテストや自主学交流会の中で意欲を高めることができた。また、ICTを活用して楽しみながら学習に取り組む児童も増加した。しかし、そこから学習全体を楽しんでいると感じさせることに課題が残り、学校や家で学習することが楽しいと感じている児童は75%であった。	・努力することのできるようになったと感じさせる機会の創出 ・自主学習だけでなく、勉強が楽しくなるような授業改善	
徳	D 自己を見つめ直し他者を思いやる心の育成	達成感を味わうことができる活動を多く設定することにより、自己肯定感を醸成するとともに、「傾聴」「対話」を大切にされた道徳教育や豊かな体験活動を推進し、思いやりを育成する。自分にはよいところがあると思う児童80%以上を目指す。	3.4	自分には良いところがあると回答した児童は、全体で93.3%となり十分目標は達成できたと感じるが、一学期から二学期にかけて不登校傾向の児童が増加している。昨年と比較しても全国的な傾向ではあるがその増加傾向がみられる。	・HSCなど高い共感力を持った児童に対しての理解を深める研修の実施 ・自己肯定感を高める実践の共有 ・児童の実態共有	・不登校児童への対応もしっかりとしてほしい。 ・ふるさと学習では各学年取り組みを共有する時間の確保
	E 多岐にわたる体験活動を通じた協調・協働性の育成	統合により新しい人間関係も形成する中で、学級活動・学校行事・クラブ活動・委員会活動・集会活動などの学級内外の特別活動を充実させ、同学年または異学年間で協力することの大切さを実感できるようにする。年齢を問わず友達と力を合わせることは大切だと思える児童90%以上を目指す。	3.6	友達と力を合わせることは大切だと思える児童は一学期に比べて上昇し、二学期は99%が肯定的な回答をしていた。同学年や異学年での交流は回を重ねることに、楽しんだり協力したりする様子が多く見られるようになってきている。しかし、依然として「あまりそう思わない」といった少数の意見があるのも事実である。	・様々な形態の集団活動において、児童が活躍、または楽しんで取り組めるように教師がサポートし、成功体験を積ませる。	
	F 地域と繋がり誇りに思えるふるさと学習の充実	ふるさと学習の推進や、地域ボランティアの方々との持続的な関わりによって、児童が地域との繋がりを実感し、地域の魅力を発信する活動などを通して、自分の住む地域を好きだと思う児童85%以上を目指す。	3.3	・ふるさと学習を通して自分の住む地域が好きになったかを問う質問に92%の児童が肯定的な回答をしており、地域への愛着が育まれていることがわかった。 ・昨年度作成した年間計画をもとに、見直しをもって活動に取り組むことができた。 ・ふるさと学習の研修や各学年の取り組みを共有する機会が少なかった。	・継続して地域と連携しながら取り組むふるさと学習 ・低中高別にふるさと学習推進担当の配置	
体	G 運動習慣の定着による基礎体力の向上	運動能力や興味・関心に沿ったハッスルキッズ、外遊びチャレンジの実施・校内表彰等を通して運動が好きな児童を育成する。また、体力測定の結果をもとに児童の体力・運動能力の課題を明確にし、系統だった体力・運動能力向上に取り組む。各学年5種目以上で県平均を上回ることを目指す。	3.1	「進んで体を動かして運動をしたり、遊んだりしている」は9割、「自分の体力がつくように心がけて、外遊びをしたり、ハッスルキッズや体力テストに進んで取り組んだりすることができた。」では8割を超す児童が肯定的な回答をしている。運動している子が固定しているのは気がかりだが、休み時間には多くの子どもが運動場で遊んでいる姿を見かける。体力テストの結果は、多くの種目を県平均を上回ることができた。	・引き続き運動が好きな児童を育成するためにハッスルキッズ、外遊びチャレンジの実施 ・校内表彰等を実施	・生活習慣の定着を保護者と連携しながら取り組みを継続してほしい。
	H 発達に応じた保健指導による基本的な生活習慣の定着	基本的な生活習慣を確立するため、生活調べを活用して、保護者の積極的な協力を得ながら自身の生活習慣を振り返る機会を繰り返すことと共に、発達課題に応じた学習内容を取り入れていくことで「早寝・早起き・朝ご飯」の項目において達成率85%以上を目指す。	3	「早寝・早起き・朝ごはんを意識して生活することができている児童が81%」「テレビ、ゲーム、インターネットなど時間を決めてやりすぎないようにしている児童が69%」であった。生活調べからも年々、ゲームやインターネット使用により就寝時間が遅くなっていることが分かった。引き続き生活リズムのチェックやアウトメディアの取り組みが必要である。	・生活習慣、ゲームとインターネットの使用ルールについては、保護者の意識改革も必要であるため、学校医や関係機関と連携し、医学的、専門的なアプローチの検討	・メディア使用の時間が長いので保護者に時間管理をしてもらえばどうか。 ・人権教育講演会への参加呼びかけを強化する。
	I 豊かな関係作りによるレジリエンスの強化	学級活動では、主体的な話し合いやエンカウンターを行い、安心できる集団づくりに努める。また、異学年での活動の中で自尊感情が高められるような「東っ子集会」などの集会活動を充実させる。「自分にはみんなを大切にしている」、「自分にはみんなに大切にされている」と感じる児童それぞれ90%以上を目指す。	3.2	安心した学校生活を送っている児童が多く、98%の児童が「みんなを大切にしている」、91%の児童が「みんなに大切にされている」と感じることができている。定期的に行われる東っ子集会では、高学年が率先して準備をし、下級生を楽しませようとする姿が見られた。	・学級活動や異学年交流の充実による自尊感情の更なる向上	・レジリエンスの教育は大事なことで、保護者にも周知してほしい
学校運営	J 学園構想に基づいた小中一貫教育の推進	特色あるカリキュラム「ふるさと学習×キャリア教育」を年間指導計画に沿って進め、重点指導目標「つながり」を育む一貫した教育を行う。また、小中の教職員で構成される部会を年間4回開催することで、東部学園の土台を構築し、円滑な運営を進める。	3	学年毎に年間指導計画に沿って「ふるさと学習×キャリア教育」を進めることができた。部会運営に関しては、小中一貫教育実施初年ということもあり、スムーズにはいかなかった。しかしその背景には、校時の違いや部活動の有無、また施設の問題などの解決が困難な要因が見られ、抜本的な改善が必要である。	・学園組織の再構築 ・小中一貫担当教員の確保 ・市教育委員会の介入 ・小中一貫教育推進マニュアルの作成	・超過勤務軽減に向けて、教員増加を市や県に要望してほしい。 ・超過勤務軽減に向けて、教員増加を市や県に要望してほしい。
	K 業務の効率化による働き方改革の推進	五條市GIGAスクール構想を推進し、業務の精選と効率化を図る。また、業務の偏りが少ないよう常に組織の見直しを行う。付随作業にかかる時間を短縮するための情報を発信する。これらの取り組みを行う中で、給付法で定められている超過勤務上限(1ヶ月45時間1年間360時間)を超える教師を0人にする。	2.6	ICT機器の活用や情報共有等を積極的に行うことができた。チャットや校務支援システムを活用して時間を削減することができた。しかし、統合に関わり検討が必要なことや配慮が必要となることが膨大であり、業務時間を削減することは難しかった。ほとんどの職員が超過勤務の上限をかなり超えて勤務している。	・引き続き業務の精選 ・市教育委員会・県教育委員会への呼びかけ	
今年度の成果と次年度への課題		○論理国語の授業マニュアル作成 ○読書環境の整備 ○自主学習の推進 ○自己肯定感の向上 ○地域への愛着 ○集団づくりの取り組みによる自尊感情の高まり		△「書く力」の向上 △家庭での読書習慣の定着 △学習することが楽しいと感じる児童の育成 △HSC傾向にあたる児童の共感的理解 △家庭での生活習慣の改善 △小中一貫教育推進のための学園組織の再構築		

※総合評価【4点満点】A:3.4以上(達成率85%以上) B:3.3~2.8(達成率84%~70%) C:2.7以下(達成率69%以下)